

読書通信



No. 164

① 天皇は皇居の奥深くでただ祈っていたらいいという評論家がいる。なんと失礼な話だろう。天皇皇后は全道府県をすでに2巡し、36の諸国を訪問、沖縄11回、被災地は教え切れぬほど慰問している。離島も多い。その姿に国民はどれほど励まされ安らいだことか。だが旅の裏には多くの秘話があった。特に高齢の昨今では。

井上亮『象徴天皇の旅』（平凡新書、972円）は天皇の旅に同行したベテラン記者による稀有の書。お二人の思いと祈り、迎えた人々の受け止め方、旅程や警備の問題点、形式主義批

判などが明確に伝わってくる。人々に語りかける一言一句には心を打たれるし、厳しい日程をこなし続ける執念には驚かされる。被災地も沖縄もベリリュー島も、訪問の事実自体が天皇皇后によって日本人全体に突きつけられた問題なのだ。そう本書は問うているように思える。質量ともに読み応え十分の力作である。

② 医者と向き合ったとき、その断定やら助言やらに對し納得か反発か、どちらが多いだろう。もつと強い薬にするか、手術にするか、もうそつとしておくか。迷うのは患者だけでなく家族も同様であるはずだ。大竹文雄・平井啓編著『医療現場の行動経済学』（東洋経済新報社、2592円）は医師と看護師、患者とその家族にとつてとても参考になる実践的な本である。

心理学をうまく使うことで医療関係者は効率よく患者と家族に合理的な意思決定を促すことができる、ということがよくわかる。こうした心理学を活かす過程が行動経済学そのものであり、本書は医療関係者と患者および家族の関係を考えながら、併せて行動経済学の基本と応用も学べるという、一石二鳥の優れた内容をもつ。がん治療、終末医療などが心配になり始めた人々にぴったりの書としてお勧めしたい。

③ 東芝本はたくさん出ているが、大鹿靖明『東芝の悲劇』（幻冬舎文庫、788円）は決定版といえるのではないか。西室泰三、西田厚聡、佐々木則夫、田中久雄。歴代社長4人に重大な責任があることが豊富な取材により完膚なきまでに明白になる。私利私欲最優先のトップの判

断によって巨大企業が瓦解へと突き進む様はバニク映画のようだ。傍流から社長への抜擢は必ず失敗するという結論も大いに説得的だし、財界人として一時は栄華を極めた男たちの素顔を知りつつ学ぶ格好の経営書である。

④ 今年には台風の当たり年だった。でも台風のことには意外に知らない。筆保弘徳編著『台風についてわかっていないこと』（ベレ出版、1836円）は大学や気象庁の専門家が台風の発生、発達、進路、性格を易しく解説している。中心の気圧や風速は実測が難しいため気象庁が推測しているとか、海面の水温以上に海中深い温度がカギを握るなど、科学はほんとに面白い。台風の実実はまさに目から鱗であるだろう。
滯蓄うんちくを語るにも役に立つ。
（浅野 純次）